天誅組始末記

小中陽太郎

天誅組始末記

小中陽太郎

大和書房

K071

〈検印略〉

天誅組始末記

一九七〇年八月二五日　初版発行

著者　小中陽太郎

発行者　大和岩雄

発行所　大和書房
東京都文京区関口一の三三・〒一一二
電話(二〇三)四五一一・振替東京六四二二七

整版・印刷　東洋印刷

製本　東京美術紙工

© 1970, 落丁・乱丁本はお取替えします

0021-050050-4406

天誅組始末記／目次

序　章〈プロローグ〉　七

第一章　一五

大　和　路　一六

隻眼の軍師　二三

土佐の虎　三一

中山忠光卿　四六

第二章　五五

その前夜　五六

決　起　六一
天誅組河内勢　七一
真紅の大旗　七八
五条代官所　九〇
クーデター　一〇八
第三章　二一九
十津川郷　一三〇
高取城攻防　一三〇
追討軍　一四五
離　反　一五八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第四章　一七五
光平無惨　一七六
鷲家口　一八四
残念大将　一九八
裏切り　二一〇
壊滅　二二二
夜明け、そして…　二二六
終章〈エピローグ〉　二四七

装幀／横尾忠則　挿絵／佐伯安淡

天誅組始末記

序章〈プロローグ〉

1

雪に埋もれた金沢の辻々に、馬橇の鈴の音にまじって、旅順陥落の号外の鈴が響いたとありますから、明治三十七年暮れのことでしょうか。インバネスを羽織った陰気な老人が、金沢地方裁判所の玄関を出ると、雪の中を、俥に乗って、市内殿町の櫺子窓のある暗い家に戻ってまいりました。

金沢地方裁判所検事五級俸高等官四等、水郡某は、年来、北陸の湿気に神経痛を病んで、痛みがとまりません。老人は、三和土で雪駄の雪を払いおとすと、そのまま、無言で書斎に通ります。家人も、老人が年とともに不機嫌になっているのを知っていますから、敬して遠ざけている。わずかに下女が茶を運びます。

老人は、六法全書や判例書をわきによせると、机の向こう側の障子をあけました。兼六園の樹々が白雪に重く頭を垂れている。この歳になっても老人は、金沢という土地になじめません。いや、明治という世になじめない。かれが命をかけて作ったものは、こんな陰気な世界だったのか。

ふるさと河内では、いまごろはあたたかい陽だまりの中で、童女が石ケリをして……。しかし、老人が心になつかしんでいるのはただ、明るい陽差しだけでしょうか。

老人は机の前に戻ると、黙々と墨をすりました。そして、背をこごめ、神経痛の痛みをこらえながら、この日頃、日夜、書き進んで来た自叙伝の最後に、こう書きました。

辞世

此の世にはたてた功のなければや
せめて報ひめ後の世に社

外でひとしきり雪しぐれが騒ぎます。

老人は自ら、この世になんの功しもないと考えています。そして、長い辛酸に満ちた生涯をふりかえって、暗澹たらざるを得ないのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しかしそうでしょうか。

明治維新とはそんなものだったのでしょうか。この、背をかがめた神経痛の老人の、若き血の上に、維新は成ったのではないか。

その年の秋は早く、十月八日でも高原は雪でした。飛行場への橋の上で若い学生たちが倒れていました。私たちは、ある人々を移送していたのです。

車のヒーターはあまりきかず、フロント・グラスからは粉雪が舞いこんでいました。白い山肌が車窓の外を、ゆっくりと移動していきます。

峠を越えて運転をかわりました。私は後部座席で毛布をひろげると、一冊の薄よごれた本をとり出しました。

たちまち、その古ぼけた本の間から、一人のうだつの上がらない老人が、亡霊のように浮かび上がって来たのです。その老人は、明治も末期になって、この山の向こう側、北陸路のかなたで、日本海の海鳴りをききながら、神経痛をこらえこらえ、長い遺書を書いた。まるでその遺書だけが、自分の存在証明であるかのように。

私は、この陰気な老人を手がかりに、逆に維新の方へと、戻って行きました。

2

大阪の阿倍野から、近鉄で四十分ほどのところに富田林という町があります。ここは二上、葛城、金剛の三山が薄く霞の中にそびえ立ち、柿の実が高く家の塀の間から顔をのぞかせている平和な町です。この富田林からさらに河内長野まで、単線の電車に揺られると、二つ目に甲田という駅があります。この駅を降りて、石川に沿って富田林街道をものの五分も歩くと、水郡庸皓さんという人の家に出ます。この人に『河内天誅組の研究』という本があるのです。

私が偶然の機会でこの本を手にしたのは、前にも

いったように、ちょうど若い学生たちが首相の南ベトナム行きに反対して、空港の近くの橋で激しい闘争を展開した直後でした。私自身も、アメリカの脱走兵を援助することに専心専念していた頃のことです。

この本の中に、水郡長義という人の自叙伝が載っていたのです。この自叙伝は、いわば明治の、金もなく、藩閥、大藩の後楯もなく、家柄もないひとりの青年が、いかに苦闘して生きてゆくかということの報告ともいえたのです。

「……昌平学校入学当時は学力の進歩に見るべきところありしが、仲間の学生は全て薩長土、旧幕時代とは気質、学力全く劣れり。討幕の勲功のみにて、入学せしゆえ、学術以外に、政治のみを論じ、なお忌むべくは、学生の風規、最も悪く、ややもすれば、酒楼に登り、酒をあおり、長刀を抜く。はなはだしきは芸妓を招くのみならず、吉原、深川の青楼に流連するを以て、自ら誇り、他の謹慎家を因循固息と呼ぶに至る」

英太郎は、官軍出身ですので、上等兵の俸給を受けていたのですが、明治三年には東京府貫属士族と身分が変ります。ところが、これが痛しかゆしで、上等兵の俸録を失ってしまう。しかし、ともかく四人扶持の金で苦労しております。そこへ起こるのが、政教一致論。何でも大学拡張で大講堂が新築され、天皇が親臨されるというのに際し、教授陣の一新をはかったらしい。英太郎はたちまち造反組に名をつらね、松平春嶽に献策します。これに対して、管理者側がうって来た手が徹底しています。学校廃止です。

「候（春嶽）及び秋月大監察ら事の容易ならざるを察し、百方、慰諭鎮撫に勉めしも、学生ら屈服せざるをもって、ついに太政官より、当分、その大学を廃す。寄宿舎は三日以内に退去すべしとの命令一下したり。予ら鳩首凝議するも策の出づべきなし。

資力ある者は皆私学に転じ、あるいは、藩邸に退きたりといえども、予は帰るに藩邸なし。私学に転ずるに資力なし」

どうも、ややこしい漢語がまじりますが、要するに、昌平校に入ったときは、自分もよく出来たが、当時の学生は、維新時の成り上がりの薩長土の藩士が主だし、かれらは、政治、政治と、放歌高吟するばかりで勉強しない、というのであります。どこぞの大学の学生にも似ているようだ。しかも、もっと悪いことに、女遊びはする、酒はのむ、あげくの果ては遊郭から登校したのだが、ここに、煽動家がいたかして、政教一致論の尻馬に乗った。現代でいえば、産学協同路線粉砕、国大協路線断乎破棄といったところでしょうか。

ところが、敵もさるもの、秋月大監察は機動隊をいれて大学をロックアウトしちまうどころか、大学を廃止してしまった。

おそらく、これこそ、わが国における最初の、大学紛争でありましょう。

さて、大学閉鎖となると、金のあるものは私学に行き、大藩のものは各藩が引きとったが、ここに本篇の主人公のような一庄屋の小伜には行き場がなくなった。——

と、まあ、大体そんなことが書いてあるのであります。

それで、かれはどうしたか。

明治四年の項にこうあります。

『十九日正午十二時『グレートパブリック号』に乗りこむ。本船上等室には本邦の官吏華族学生など多数塔乗するも、予の如き下等の客あるを見ず、甲板に立ち芒然たること久し。ようやく、舫を解き、観音崎に至る頃、一宣教師の邦語を能くする人の斡旋により、下等室にいたるをえる、その途中、支那人室を通過するに、あたかも人、酢の如く充満、悪臭鼻をうち、ほとんどたえあたわざるものあり。当

時、日本人の下等客は、欧米人と雑居にして船の最下階室なり、予のいたるを見るや一、二の白人ひじを枕とし、横臥すべしとみぶりですすめたり。しばらくして室外に振鈴の音するや、みな起きて口を指し、同行をすすむも、予、ついに解せず、黙然たるを以て、人々みな去れり。予、当日朝、出発にさきだち、にぎりめし二日分、梅干若干を缶に入れて携行す。その意は、もし船中、邦語を解する白人なく、食堂にすら行くあたわざる時は、これを食し、予一人、跪座して、にぎりしめしを喰う時なりと、すなわち缶を開き喰う際、一日本人来る。奥州相馬藩士族にして、八景又六とて、予と同じく渡米、生を営む余暇、学問せんとするにあり、と」

悲しい話です。胸がつまるような話です。日本留学生草創期の学生たちは、こんな悲壮な決心でグレートパブリック号に乗りくんだ。

もし船中、ことばが通じなかったら、にぎりめしを食おう、といったって、行くところはアメリカ、熱田から桑名へ抜けるのとは話がちがう。そんな覚悟をして、アメリカへ渡ったのです。

この留学でかれが得たものは何でしょうか。結論を先にいってしまえば、かれは何の成すところもなく、敗北者として日本へ帰って来るのです。そして、結局は裁判所の書生になり、艱難辛苦の末、最後に金沢の地方裁判所の検事になったのが最高の出世です。そのあと停年退職、奈良に帰って、公証人になり、一生を終えるのです。

そのかれが最後に残したものが先にあげた、自分は何の功績も残していない、せめて後の世になって報いよう、という辞世なのです。ところが、この人は、何の功しもないどころではないのです。

あの日——

文久三年八月、大和。

主将・中山忠光以下、四十名、河内に入り鎧かぶとも凛々しく、いでたった日。その日、中山公自ら、少年に言葉をかけたのでした。

「我、幼といえども、常に撃剣を学ぶは、かかる時の用意なり、我もまた軍に従い、功名せんものと、父に向い、父、大いに喜びて、貯蔵の鎖かたびら、袍衣、陣笠を与える。これを着し、勇躍、なげしにかけたる長鎗を執り、前庭に出て、これを操ること数十度、けだし、少年といえども、また、もって用いるに足るの姿勢を示したるなり。

中山侍従　之を見て曰く

『好少年用うべし

自愛せよ』と」

それも、これも一場の夢なのでしょうか。

3

富田林の水郡庸皓さんは、この水郡長義の朔にあたるのですが、この人の案内ですぐ裏の本家を尋ねてみました。大和特有の築地塀をめぐらせた赤土の間を上がって行きますと、広い門構えの水郡本家がありました。屋根の垂れ木が特別製で、大和の庄屋の証拠なのだそうです。裏に出ると、武道好きだった水郡家の主が建てた道場があったといわれるあたりに、高い松が一本立っています。そのかたわらの大和の柿が夕陽を受けてかがやき、鶏が鳴いていました。外は一面の稲田です。

水郡家を辞して、田んぼの向こうの養楽寺に向かいました。

養楽寺は大和の山々を見はるかす高台の田んぼの中央にある小さな田舎の寺です。庫裡で、女たちが茶の湯をたてていたらしく、正装した婦人たちが、案内役の水郡氏に礼をしました。

本堂は三間ほどの小さな堂です。

うらにまわると、墓があった。百姓の小さな墓です。

葛城のよく見える一角に苔むした、水郡長義の墓が立っていました。

少し離れたところに、長義の父であり、河内天誅

組の指導者、水郡善之祐の墓があった。これは京都で処刑されている。

それよりも、私は、そこにならんだ水郡家の息子や孫たちの墓に刻まれた戦死の文字のつらなりの方に目を射たれました。

戦前の日本の農村の墓には、必ず、戦死者の名があるものですが、これは少し多すぎないか。私は、水郡家には、国のために死に急く血が流れているのではないか、などと考えていました。

墓石は次のとおりです。

水郡善之祐　天誅組　元治元年　京都にて刑死

水郡富三郎　日露戦争に大阪第八連隊副官として参加、満州沙河にて戦死　歩兵少佐

水郡喜市　日露戦争に参加、沙河にて戦死　砲兵伍長

水郡長祐　大東亜戦争に参加、中支にて戦死　歩兵中尉

つまり、水郡家は明治百年の歴史の中で、いや明治の始まる前から、長男や男の子たちを国家に供出して来た。天誅組、日露戦争、大平洋戦争　…。

私か家を辞そうとすると、墓の下を、富田林高校のマラソン大会らしく、少年たちか駆けぬけ、女子高校生たちが、黄色い声援を送っていました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com